

---

---

# 日本地球化学会ニュース

No .174

2003 .7 .15

---

---

## 主な記事

### ●学会記事

- 2003年度日本地球化学会年会のお知らせ（最終案内・プログラム）
- 第13回ゴールドシュミット国際会議（Goldschmidt 2003）日本開催のお知らせ
- 地球化学講座初回刊行と会員割引価格販売のお知らせ
- 日産科学賞・候補者推薦について
- 研連，各種委員会議事録

### ●その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ

- 書評
- 鳥居基金募集要項の訂正について

現在，日本地球化学会のホームページを国立情報学研究所ホームページ内の学協会情報発信サービスの中で公開しております。研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらをご覧ください。

URL アドレスは，<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj2/index.html> です。

また，独自ドメイン名を取得いたしましたので，こちらも公開中です。

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

## 第50回(2003年度)日本地球化学会年会 最終案内(プログラム)

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会

後援：くらしき作陽大学

倉敷市・倉敷市教育委員会

会期：2003年9月7日(日)

会場：くらしき作陽大学(山陽本線/山陽新幹線新倉敷駅から徒歩12分)1号館

内容：地球化学公開講演会、一般講演(ポスター)、総会

地球化学公開講演会 入場無料：

『世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の未来』

中・高校生を含む一般市民向け公開講演会

紀本岳志「瀬戸内海をはかる 観測データが語る豊かな海の未来」

田上英一郎「海の物質循環をつかさどる小さな生き物たち」

2003年9月7日(日) 10時30分～12時30分

くらしき作陽大学1号館125号室

一般講演発表分野：大気/降水, 岩石/地殻, 鉱床, 有機物, 生物, 陸水, 温泉/熱水, 地球外物質, 海洋, 堆積物, 環境

その他(Goldschmidt会議に含まれる分野)

一般講演発表形式：ポスターセッション

午前10時開場, コアタイム13時～14時, 15時取り外し, ポスターボードの幅は150cm, 高さ130cm, 掲示用のピンなどは会場受付に準備します。

総会：9月7日(日) 14時～15時30分

学会賞などの表彰は総会の中で行いますが, 受賞講演はGoldschmidt国際会議(講演は9月8日から12日まで)の中で行います。

懇親会：年会独自には行いません。Goldschmidt会議のIcebreaker Partyに合流します。

9月7日(日) 17時～20時(流れ解散)

場所：くらしき作陽大学学生ホール(食堂)

参加登録費, 懇親会参加費など

1. 参加登録費(講演要旨集1部および送料を含む)

予約申し込み(2003年8月11日(月)まで)

会員：1,000円, 学生会員：500円,

会員外：3,000円, 学生会員外：2,000円

(予約申し込みに限り, 会員で有る無しにかかわらず, Goldschmidt会議参加者は無料)

当日受け付け

会員：2,000円, 学生会員：1,000円,

会員外：3,000円, 学生会員外：2,000円

2. 懇親会参加費

予約申し込み(2003年8月11日(月)まで)

一般：1,000円, 学生：500円

当日：2,000円

(Goldschmidt会議Icebreaker Partyに合流するので, Goldschmidt会議参加者は無料)

3. 講演要旨集(当日販売)：1,000円/部

講演要旨集(郵送)：1,500円/部

4. 参加費, 講演要旨集代, 懇親会費の支払い方法

郵便振り替えにて送金(送金内訳を明記のこと)

(郵便振替受領証をもって領収書とする。別途領収書を必要とする場合, 大会当日, 受付に申し出る)

郵便振替口座：00880 3 78731

加入者名：日本地球化学会2003年準備委員会

参加申し込みなどの日程(いずれもホームページから)

講演申し込みは6月17日に締切りました。

講演要旨受け付け締切り：2003年7月15日(火)

17:00, または2003年7月11日(金) 必着での郵送

参加予約申し込み締切り：2002年8月11日(月)

17:00

参加予約申し込みはホームページ上からの受付に限らせて頂きます。学会ホームページ<<http://www.geochem.jp>>から所定のページを開いて下さい。講演要旨も出来るだけホームページ上から所定の書式に従ってお送り下さい。ホームページからの要旨の送付が困難な方は, 7月11日(金) 必着による郵送で受け付けます。地球化学37巻2号ニュース添付の『講演要旨作成上の注意』に従って作成し, 下記の年会連絡先へお送り下さい。

宿泊など：準備委員会から御世話は致しません

Goldschmidt国際会議のサイト

<<http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>>

に宿の紹介があります。

年会連絡先：

〒464 8602 名古屋千種区不老町

名古屋大学環境学研究科地球環境科学（理学部）

E-mail : <nenkai@gcl.eps.nagoya-u.ac.jp>

2003年度日本地球化学会年会準備委員会

大会準備委員長 田中 剛

講演・参加申し込み・要旨送付に関する問い合わせ：

事務局 山本鋼志

米田成一，小林貴之（学会ホームページ担当）

会計 南 雅代

Tel : 03 3364 7142, Fax : 03 3364 7104

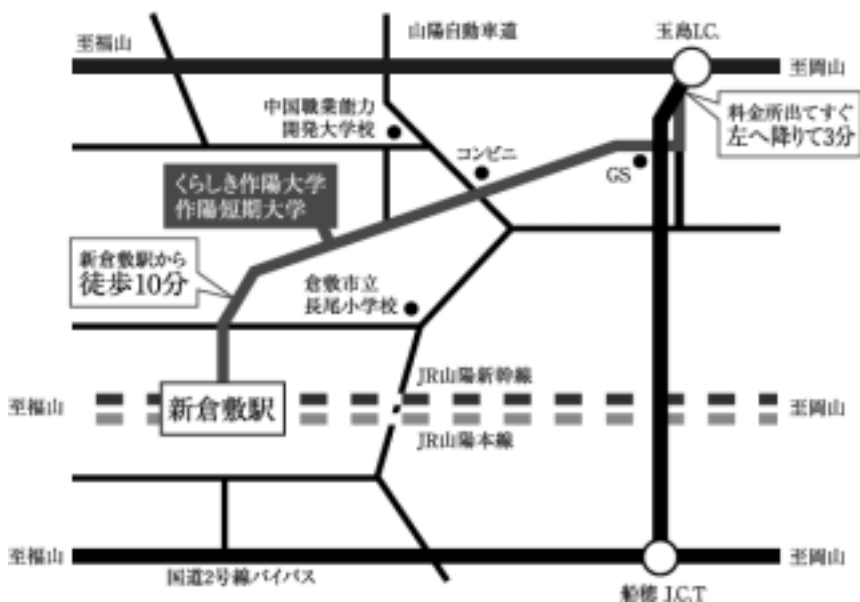
Tel : 052 789 2522, Fax : 052 789 3033

E-mail : <nenkai 2003@geochem.jp>

学会 HP : <http://www.geochem.jp>

### 会場へのアクセス方法：

1. JR 山陽新幹線 / JR 山陽本線 新倉敷駅下車  
北方の水道タンクをめざして徒歩10分，後半やや登り坂
2. 山陽自動車道路玉島 I.C. 料金所から 3分



会場の1号館は，正門を入れて右側の大きな建物です。

## 〔プログラム〕

### 地球化学公開講演会

『世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の未来』

中・高校生を含む一般市民向け公開講演会，入場無料

野津憲治 『地球化学公開講演会の開催にあたって』

紀本岳志 『瀬戸内海をはかる 観測データが語る豊かな海の未来』

田上英一郎 『海の物質循環をつかさどる小さな生き物たち』

会場：1号館125号室

時間：10時30分～12時30分

### ポスターセッション

会場：1号館ロビー

時間：10時掲示開始15時終了，コアタイム13時～14時

- 1 P 01 2001年つくば降水物における主要並びに微量元素濃度とその特徴（<sup>1</sup>武蔵工大原研・<sup>2</sup>武蔵工大工・<sup>3</sup>気象研） 本多照幸<sup>1</sup>・石田幸三<sup>2</sup>・五十嵐康人<sup>3</sup>・青山道夫<sup>3</sup>・廣瀬勝己<sup>3</sup>
- 1 P 02 西部北太平洋洋上における大気エアロゾルの化学的性状と輸送の特徴（<sup>1</sup>東大海洋研・<sup>2</sup>科学技術振興事業団） 松本潔<sup>1,2</sup>・宇山悠紀子<sup>1</sup>・早野輝朗<sup>1</sup>・植松光夫<sup>1</sup>
- 1 P 03 降水，河川水中の窒素化合物の<sup>15</sup>N濃度分析と陸起源窒素の海洋表層への負荷について（北大院地球環境） 南川雅男・碓井敏宏・高山良太・大橋麻美・長尾誠也
- 1 P 04 鹿児島県川内市平ノ山玄武岩の風化過程（鹿大） 林佳奈子・山本温彦
- 1 P 05 野島断層ボーリングコア試料から採取した方解石の<sup>230</sup>Th-<sup>234</sup>U年代測定（<sup>1</sup>東大地震研・<sup>2</sup>静大理） 渡邊裕美子<sup>1</sup>・中井俊一<sup>1</sup>・林愛明<sup>2</sup>
- 1 P 06 単一鉱物粒子によるRb-Sr 鉱物年代測定の試み（名大院環境） 若木重行・田中剛
- 1 P 07 Ce-Nd-Sr 同位体による，日本列島下のマントルウエッジ組成についての地球化学的研究（名大院環境） 林隆正・田中剛
- 1 P 08 四国三波川変成帯に産する肉淵超塩基性岩体の起源（<sup>1</sup>名大院理・<sup>2</sup>名大院環境） 仙田量子<sup>1</sup>・加地拓哉<sup>1</sup>・田中剛<sup>2</sup>

- 1 P 09 黒耀石の微量元素組成からみた地域的特徴（<sup>1</sup>立正大・<sup>2</sup>明治大） 中井弥生<sup>1</sup>・福岡孝昭<sup>1</sup>・杉原重夫<sup>2</sup>
- 1 P 10 塩素の同位体宇宙地球化学<sup>③</sup>標準岩石の塩素同位体比（海技大校・<sup>2</sup>神戸大院自然科学・<sup>3</sup>神戸大理） 藤谷達也<sup>1,2</sup>・中村昇<sup>2</sup>・林恭子<sup>3</sup>
- 1 P 11 エントロピーの四組効果と希土類元素地球化学 その2（名大院環境） 川邊岩夫
- 1 P 12 炭酸カルシウムに取り込まれる希土類元素の酸化数の測定（<sup>1</sup>東大院理・<sup>2</sup>産総研） 吉田哲章<sup>1</sup>・鍵裕之<sup>1</sup>・津野宏<sup>2</sup>
- 1 P 13 鉱物からの希土類元素の溶脱における結晶構造規制（名大院環境） 柴田信之介・田中剛
- 1 P 14 明礬石族鉱物生成時におけるランタノイド元素の分配（上智大理工） 長谷川潤
- 1 P 15 CZ法によるケイ酸塩ガーネットの合成と問題点（<sup>1</sup>東大アイソトープ総合セ・<sup>2</sup>明治大理工・<sup>3</sup>学習院大理） 森岡正名<sup>1</sup>・中村利廣<sup>2</sup>・長沢宏<sup>3</sup>
- 1 P 16 蛍光分光法で見る鉱物溶解速度の結晶面依存性（東大院理） 福良哲史・角森史昭・鍵裕之
- 1 P 17 コンクリートストロー中の硝酸イオンに関する研究（<sup>1</sup>琉大院理工・<sup>2</sup>琉大機器分析セ） 森山文基<sup>1</sup>・棚原朗<sup>2</sup>・小沢奈央<sup>1</sup>
- 1 P 18 バングラデシュ中央部における地下水水質の季節変動（<sup>1</sup>岡大環境理工・<sup>2</sup>大阪市大理） 小林滋<sup>1</sup>・益田晴恵<sup>2</sup>・西垣誠<sup>1</sup>
- 1 P 19 中国四川盆地北部の地下水の水質と水循環に伴う汚染過程（<sup>1</sup>大阪市大院理・<sup>2</sup>岡大固地研・<sup>3</sup>成都理工大） 李曉東<sup>1,3</sup>・益田晴恵<sup>1</sup>・大野雅子<sup>1</sup>・日下部実<sup>2</sup>・曾海賢<sup>3</sup>
- 1 P 20 多摩川における溶存一酸化二窒素のアイソトポマー比の時系列変化（<sup>1</sup>東工大総理工・<sup>2</sup>東工大フロンティア創造セ・<sup>3</sup>科学技術振興事業団） 岩井宏之<sup>1</sup>・吉田尚弘<sup>1,2,3</sup>・豊田栄<sup>1,3</sup>
- 1 P 21 瑞浪超深地層研究所計画第1段階における地下水の地球化学特性について（核燃料サイクル開発機構東濃地科学セ） 水野崇・岩月輝希・古江良治・彌榮英樹
- 1 P 22 淀川水系における窒素およびリンの分布・挙動（近大理工） 有井康博・山口善敬・坂本正

- 子・ 中口讓
- 1 P 23 大阪府南部地域における地下水中のヒ素濃度季節変化と硫黄同位体比との関連性(<sup>1</sup>大阪市大院理・<sup>2</sup>岡大固地研) 大野雅子<sup>1</sup>・益田晴恵<sup>1</sup>・日下部実<sup>2</sup>
- 1 P 24 鹿児島市地下水中の化学成分の挙動(鹿大理) 梶原佑介・坂元隼雄・富安卓滋・穴澤活郎
- 1 P 25 鹿児島県網掛川および別府川水系における水質の年変化(鹿大) 西中須暁子・山中祐樹・山本温彦
- 1 P 26 南九州河川における主要化学成分の空間把握(鹿大理) 穴澤活郎・顕谷久典・坂元隼雄・富安卓滋
- 1 P 27 九州地区における温泉水中の希土類元素の定量分析(九大院理) 富永武・石橋純一郎
- 1 P 28 温泉からみた東北日本北部域における地殻内流体の形成過程(東北大院理) 谷口敦行・箕浦幸治
- 1 P 29 熱水ブルーム中の溶存有機態金属(電中研) 下島公紀
- 1 P 30 酸性降下物による森林土壌の劣化の指標となりうる有機分子に関する研究(<sup>1</sup>東海大院海洋・<sup>2</sup>名大農・<sup>3</sup>広島大総合科学) 安田朝子<sup>1</sup>・西村弥亜<sup>1</sup>・網島直哉<sup>1</sup>・竹中千里<sup>2</sup>・佐久川弘<sup>3</sup>
- 1 P 31 ナウマン象臼歯化石から抽出したアミノ酸の<sup>14</sup>C年代とラセミ化反応(<sup>1</sup>名大院環境・<sup>2</sup>名大年測セ) 南雅代<sup>1</sup>・村中泰志<sup>1</sup>・中村俊夫<sup>2</sup>
- 1 P 32 現世および先カンブリア代ストロマトライトの酸化抽出で得たマレイミド類とフタルイミド類(<sup>1</sup>筑波大・<sup>2</sup>産総研) 野本信也<sup>1</sup>・小園正樹<sup>2</sup>・川添菜津子<sup>1</sup>・三田肇<sup>1</sup>・木越英夫<sup>1</sup>
- 1 P 33 モデル細胞膜小胞内部へのグリシンの取り込み(九大院理) 中島丈博・村江達士
- 1 P 34 衝撃波によるアミノ酸の変化:グリシン水溶液水の場合(<sup>1</sup>九大院理・<sup>2</sup>宇宙科学研) 家村育民<sup>1</sup>・村江達士<sup>1</sup>・矢守章<sup>2</sup>
- 1 P 35 ケイ酸塩鉱物存在下での芳香族炭化水素の衝撃反応(名大院環境) 三村耕一・外山誠司
- 1 P 36 メソシデライトケイ酸塩包有物の研究(総研大・<sup>2</sup>極地研) 玉置美奈子<sup>1</sup>・三澤啓司<sup>2</sup>・山口亮<sup>2</sup>
- 1 P 37 CR コンドライト中のコンドルールリムの酸素同位体組成(東工大) 永島一秀・竹田裕・伊藤正一・塚本尚義
- 1 P 38 Y 81020 CO3.0コンドライト中のコンドルールを内包するCAI(東工大院理工) 伊藤正一・塚本尚義
- 1 P 39 融解法を用いたマーチソン隕石からのプレソーラーグレインの分離(<sup>1</sup>東工大院理工・<sup>2</sup>学習院大理) 松濤誠之<sup>1</sup>・永島一秀<sup>1</sup>・長沢宏<sup>2</sup>・塚本尚義<sup>1</sup>
- 1 P 40 広島隕石の落下と分類(<sup>1</sup>科博・<sup>2</sup>理研・<sup>3</sup>東大地殻化学) 米田成一<sup>1</sup>・岡田昭彦<sup>2</sup>・朴芝鮮<sup>3</sup>・海老澤紀子<sup>3</sup>・長尾敬介<sup>3</sup>
- 1 P 41 太平洋堆積物の間隙水のREE組成(名大院環境) 武辺勝道・山本鋼志
- 1 P 42 東京湾,陸奥湾および噴火湾海底堆積物における主要並びに微量元素の分布と堆積環境(<sup>1</sup>武蔵工大原研・<sup>2</sup>武蔵工大院工) 本多照幸<sup>1</sup>・木村賢一郎<sup>2</sup>
- 1 P 43 南シナ海およびスル海のセレンの溶存セレン化学種(<sup>1</sup>近大理工・<sup>2</sup>東大海洋研) 竹井宗靖<sup>1</sup>・中口讓<sup>1</sup>・山口善敬<sup>1</sup>・有井康博<sup>1</sup>・服部裕史<sup>2</sup>
- 1 P 44 グアム島のサンゴ骨格記録に基づいた過去200年間の海洋環境復元(東北大院理) 浅海竜司・山田努・井龍康文
- 1 P 45 白化サンゴの骨格に見られる酸素・炭素同位体比変動:代謝効果と反応速度論的效果(産総研・<sup>2</sup>東北大院理・<sup>3</sup>オーストラリア国立大・<sup>4</sup>オーストラリア海洋科学研究所・<sup>5</sup>国土館大) 鈴木淳<sup>1</sup>・川幡穂高<sup>1,2</sup>・Gagan, Micheal K.<sup>3</sup>・Fabricius, Katharina<sup>4</sup>・雪野出<sup>5</sup>
- 1 P 46 開放的なサンゴ礁域における有機無機炭素生産量の見積もり(<sup>1</sup>琉大院理工・<sup>2</sup>琉大熱帯生物圏研究セ・<sup>3</sup>国士環境・<sup>4</sup>琉大理) 渡慶次亮子<sup>1</sup>・藤村弘行<sup>1</sup>・北田幸男<sup>1</sup>・中野義勝<sup>2</sup>・田端重夫<sup>3</sup>・大森保<sup>4</sup>
- 1 P 47 国際海洋環境情報センターの深海映像情報データベース構築と公開(<sup>1</sup>海洋科技セ・<sup>2</sup>榊マリンワークジャパン) 園田朗<sup>1</sup>・兼次藤子<sup>2</sup>・宮城伸<sup>2</sup>・諸喜田明花<sup>2</sup>・石川賀子<sup>2</sup>・大城美香<sup>2</sup>・他谷康<sup>1</sup>
- 1 P 48 産総研地球化学標準試料JCp 1(サンゴ), JCt 1(シャコガイ)の共同分析結果(<sup>1</sup>産総

- 研地球科学情報研究部門・<sup>2</sup>産総研海洋資源環境研究部門・<sup>3</sup>東北大院理) 岡井貴司<sup>1</sup>・鈴木淳<sup>2</sup>・寺島滋<sup>1</sup>・井上麻夕里<sup>3</sup>・野原昌人<sup>2</sup>・川幡穂高<sup>2,3</sup>・今井登<sup>1</sup>
- 1 P 49 産総研地球化学標準試料 JA 1a (安山岩) の作製と JA 1a 及び JSO 1 (土壌) 試料の共同分析結果 (産総研地球科学情報研究部門) 岡井貴司・寺島滋・今井登・御子柴真澄・太田充恒
- 1 P 50 日本における岩石等の地球化学情報データベースに関する研究 (産総研地調総合セ) 今井登・御子柴真澄・金井豊
- 1 P 51 VMAP 観測における無人海洋大気観測艇による日本周辺海域の大気成分測定 (1) 科学技術振興事業団・<sup>2</sup>東大海洋研・<sup>3</sup>紀本電子工業・<sup>4</sup>東海大海洋) 成田祥<sup>1,2</sup>・服部裕史<sup>1,2</sup>・植松光夫<sup>1,2</sup>・鈴木隆生<sup>1,2</sup>・紀本岳志<sup>3</sup>・千賀康弘<sup>4</sup>
- 1 P 52 大気中の煤の炭素同位体比の変動 (東京農工大) 品川士門・赤木右
- 1 P 53 酸化還元フロントの形成と二次的物質移動現象 (1) 名大博物館・<sup>2</sup>名大院環境・<sup>3</sup>英国地質調査所) 吉田英一<sup>1,2</sup>・山本鋼志<sup>2</sup>・田中姿郎<sup>2</sup>・Antony, Milodowski<sup>3</sup>
- 1 P 54 花崗岩中の酸化還元フロント形成に伴う元素の挙動 (1) 名大院環境・<sup>2</sup>名大博物館) 赤川史典<sup>1</sup>・山本鋼志<sup>1</sup>・吉田英一<sup>1,2</sup>
- 1 P 55 マルチトレーサー法を用いた花崗岩間隙水中での微量元素の拡散に関する研究 (1) 広大院・<sup>2</sup>理研) 平方亜衣<sup>1</sup>・高橋嘉夫<sup>1</sup>・蛭沼利江子<sup>2</sup>・榎本秀一<sup>2</sup>
- 1 P 56 火山地域およびその周辺地域の植物中の水銀含有量 (鹿大院) 小堀晃作・坂元隼雄・富安卓滋・穴澤活郎
- 1 P 57 シラスによる重金属 (亜鉛等) の吸着 (鹿大院) 飯盛啓生・坂元隼雄・富安卓滋・穴澤活郎
- 1 P 58 有機態金属分析による大阪湾沿岸域堆積物の環境評価 (1) 名大院環境・<sup>2</sup>神戸大内海域教育研究セ) 山田味佳<sup>1</sup>・山本鋼志<sup>1</sup>・牛原康博<sup>2</sup>・川井浩史<sup>2</sup>
- 1 P 59 有機スズ化合物の XAFS 法によるスペシエーション (1) 広大院・<sup>2</sup>海上技術安全研究所・<sup>3</sup>SPRING 8 高輝度光科学研究セ・<sup>4</sup>高工ネ

- ルギー加速器研究機構) 榊原直樹<sup>1</sup>・高橋嘉夫<sup>1</sup>・山口良隆<sup>2</sup>・宇留賀朋<sup>3,4</sup>・野村昌治<sup>4</sup>
- 1 P 60 XANES 法によるスペシエーションに基づく土壌中のヨウ素の溶出挙動の解明 (1) 広大院・<sup>2</sup>鳥取大・<sup>3</sup>高輝度光科学研究セ) 児玉紗由梨<sup>1</sup>・高橋嘉夫<sup>1</sup>・奥村和<sup>2</sup>・宇留賀朋哉<sup>3</sup>・清水洋<sup>1</sup>
- 1 P 61 愛知県の地球化学図 主要成分元素 (1) 名大院環境・<sup>2</sup>名大博物館・<sup>3</sup>名大理・<sup>4</sup>名古屋文理大情報文化) 山本鋼志<sup>1</sup>・田中剛<sup>1</sup>・南雅代<sup>1</sup>・三村耕一<sup>1</sup>・浅原良浩<sup>1</sup>・吉田英一<sup>1,2</sup>・與語節生<sup>3</sup>・稲吉正実<sup>4</sup>
- 1 P 62 愛知県の地球化学図 微量元素 (1) 名大院環境・<sup>2</sup>名大博物館・<sup>3</sup>名古屋文理大情報文化) 田中剛<sup>1</sup>・山本鋼志<sup>1</sup>・南雅代<sup>1</sup>・三村耕一<sup>1</sup>・浅原良浩<sup>1</sup>・吉田英一<sup>1,2</sup>・與語節生<sup>1</sup>・稲吉正実<sup>3</sup>
- 1 P 63 地圏環境評価指標としての Sr 同位体 (1) 名大院環境・<sup>2</sup>名大理・<sup>3</sup>名大博物館) 浅原良浩<sup>1</sup>・石黒寛子<sup>2</sup>・田中剛<sup>1</sup>・山本鋼志<sup>1</sup>・三村耕一<sup>1</sup>・南雅代<sup>1</sup>・吉田英一<sup>1,3</sup>・與語節生<sup>2</sup>

### 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ

#### プログラムの発行

会議名: 第13回ゴールドシュミット国際会議  
(Goldschmidt 2003)

Website: <http://www.ics-inc.co.jp/gold/2003/>

E-mail: [gold2003@ics-inc.co.jp](mailto:gold2003@ics-inc.co.jp)

開催時期: 2003年9月7日(日)~12日(金)

開催場所: くらしき作陽大学 (倉敷市)

主催: The Geochemical Society (国際地球化学会),  
The European Association of Geochemistry  
(欧州地球化学連合), The Mineralogical Society of America (米国鉱物学会), 日本地球化学会 (The Geochemical Society of Japan)

後援: (独立行政法人) 産業技術総合研究所, (学校法人) くらしき作陽大学, 倉敷市, 岡山県

学協会後援: 20学協会 (名称略)

会議の規模: 参加者約1200名, 発表論文数約1,150件 (口頭およびポスター), 特別講演, 企業展示, パンケット, エクスカーション

ゴールドシュミット国際会議は、General Symposia 9領域とSpecial Symposia 53テーマから構成されます。論文発表は、1,150件の申し込みがあり、すでにプログラム編成が終わっています。以下に会議日程の概要を示しますが、論文発表プログラムおよび会議の詳細は、会議ホームページ (<http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>) をご覧ください。早期割引登録はすでに終了していますが、当日現地での登録も可能です(主催学会の会員割引料金一般38,000円、学生18,000円)。

9月10日(水)午前の全体会議では、授賞式のほか、以下の特別講演が予定されています。

Gast Lecture

H. Ohmoto: Chemical and biological evolution of the early Earth: A minority report

GSJ Award Lecture

I. Kaneoka: Terrestrial noble gases - A unique indicator for the chemical structure and evolution of the Earth

Goldschmidt Lecture

B. J. Wood: The principles controlling trace element partitioning in igneous processes

ゴールドシュミット国際会議では、以下のテーマと日程で、若手研究者と学生を対象にしたショート・コースを開催します。詳しくは下記のホームページをご覧ください。

13th V. M. Goldschmidt Conference Short Course on ICP-Mass Spectrometry

<http://www.geo.titech.ac.jp/epss/ss2003/index.htm>

期間: 2003年9月6日(土) 12:30 ~ 7日(日) 15:00

場所: 岡山テルサ (JR山陽線中庄駅からタクシーで5分)

講師: G. Detlef (ETH, Switzerland), A. Halliday

(ETH, Switzerland), T. Fujii (Tokyo U), S. E. Jackson (GEMOC, Australia), K. O'Nions (Oxford U, UK)

ゴールドシュミット国際会議の開催を前に、倉敷市において、以下の二つの中・高校生、一般市民向け公開講演会が開催されます。いずれも入場無料。

(1) ゴールドシュミット国際会議記念倉敷市民講演会  
「地球と生命のふしぎ」

日時: 2003年8月24日(日) 13:00 ~ 16:30

場所: ライフパーク倉敷大ホール (JR山陽線倉敷駅からバス25分)

内容: 酒井 均: 火星にも生き物は生まれたか?

温泉大好きバクテリアは語る

風早康平: 火山噴火: その恵みと災害

野尻幸宏: 地球温暖化, これってこまるの?

どうしよう?

(2) 地球化学市民講座

「世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の未来」

日時: 2003年9月7日(日) 10:30 ~ 12:30

場所: ぐらしき作陽大学1号館 (JR山陽新幹線新倉敷駅下車徒歩10分)

内容: 紀本岳志: 瀬戸内海をはかる 観測データが語る豊かな海の未来

田上英一郎: 海の物質循環をつかさどる小さな生き物たち

(第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会委員長 松久幸敬)

(連絡先)

第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会事務局

〒305 8567 つくば市東1-1-1 中央第7

産業技術総合研究所地球科学情報研究部門

富樫茂子 気付

Tel: 0298 61 3940, Fax: 0298 61 3748

E-mail: s-togashi@aist.go.jp

	午前	午後	晩
9月7日(日)		登録開始(16時)	アイスブレイカー
8日(月)	一般講演/ポスター	一般講演/ポスター	ウェルカムレセプション
9日(火)	一般講演/ポスター	一般講演/ポスター	
10日(水)	全体会議・特別講演	オプションツアー	
11日(木)	一般講演/ポスター	一般講演/ポスター	バンケット
12日(金)	一般講演/ポスター	一般講演/ポスター	

## 地球化学講座初回刊行と 会員割引価格販売のお知らせ

日本地球化学会では、1998年9月に地球化学講座編集委員会を発足させ、全8巻からなる「地球化学講座」の出版に向け活動を行なってきましたが、本年7月10日に最初の刊行として第3巻「マントル・地殻の地球化学」(野津憲治・清水洋共編)の刊行にこぎつけました。発行所は培風館で(ISBN 4 563 04903 4 C 3344)、定価は本体3,800円、消費税込みで3,980円です。各章のタイトルと内容は以下の通りです。

- 第1章 固体地球の内部構造と構成物質(入船徹男)
- 第2章 固体地球物質の化学と同位体組成  
(鍵 裕之)
- 第3章 元素の分配 (川邊岩夫)
- 第4章 地球の誕生と形成直後の分化 (平田岳史)
- 第5章 マントル 地殻系45億年の進化(中井俊一)
- 第6章 大気・海洋の形成と進化 (佐野有司)
- 第7章 マントル・地殻における物質循環  
(岩森 光)
- 第8章 堆積作用と地球表層環境の変遷(清水 洋)
- 第9章 地殻内流体の関与する化学現象(篠原宏志)
- 付録 わが国の固体地球化学的研究のハイライト  
(野津憲治)

「地球化学講座」は、日本地球化学会の監修のもとに刊行されており、以下の要領で会員に対して2割引の特別価格(税込3,192円)での販売を実施します。以下の申込書に必要事項を記入の上、電子メール、ファクシミリ、もしくは郵送で7月末日までに培風館担当(山本宛)にお送りください。なお送料が、1冊の場合340円、2~3冊で450円、4~5冊で590円程度かかる予定です。1冊あたりの送料負担は冊数が多いほど低額になりますので、お近くの方とまとめて注文されることをお勧めします。代金の支払いは本と一緒に送られてくる請求書の金額を指定の銀行口座に振り込んでください。なお、1冊で注文の場合は送料を加えると大学生協で行なっている1割引販売とほとんど同じ額になることを付け加えておきます。

また、本年倉敷で行なう年会の際に、受け付けにて2割引販売のコーナーを作ることを予定しておりますので、御利用ください。

注文書送り先:

E-mail: bfk-2hen@mx6.mesh.ne.jp

Fax: 03 3262 5357 培風館編集部(山本新宛)

または、

〒102 8260 東京都千代田区九段南4 3 12

培風館編集部(山本新宛)

### 注 文 書

「地球化学講座」第3巻「マントル・地殻の地球化学」を注文します。

注文部数 冊

送本先

郵便番号: 〒

住 所:

所 属:

お 名 前:

電話番号:

Fax 番号:

E-mail:

### 日産科学賞・候補者推薦について

#### 1. 日産科学賞

推薦基準: 自然科学分野(人文・社会科学分野との複合領域を含む)において以下の卓越した研究業績をあげ、さらに今後の発展が期待されるわが国の公的機関に所属する新進気鋭の研究者とします。

学術研究における重要な発見

新しい研究分野の開拓

\* 原則個人表彰とする(推薦するプロジェクトで複数の研究者が対象になる場合でも扱いは1件とする)

推薦依頼数: 1名(学会からの推薦)

賞の内容: 正賞.....賞状、金メダル

副賞.....賞金500万円

推薦締切: 平成15年8月15日(金)(日本地球化学会到着分)

推薦手続き: 所定の用紙に必要事項を記入し、日本地球化学会庶務幹事宛に1部提出

\* 所定の用紙は、庶務幹事・鍵裕之(東大理学系研究科附属地殻化学実験施設)までご請求ください。

#### 2. 学術研究助成

財団へ直接応募となります。財団ホームページから記入可能な助成申請書式をダウンロードできます。応



募詳細手順はホームページの指示に従ってください。

\*電子メール添付応募と同時に印刷物1部を宅配で発送してください。(セット受付,片方のみは不可)

\*応募締め切りは平成15年7月31日(木) 17時(財団到着分)

詳細は <http://www.t3.rim.or.jp/~at02-nsj/> をご覧ください。

### 第18期第8回地球化学・ 宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時：2003年5月15日(木) 13:30~17:00

場所：日本学術会議第7部会会議室(6階)

出席者：田中剛委員長,青木謙一郎,日下部実,清水洋,下山晃,田結庄良昭,中澤高,藤原顕,松田准一 各委員

#### 報告事項

1. 学術会議関係
  - 1.1 総合科学技術会議「日本学術会議の在り方について」(2月26日)に対する,日本学術会議改革推進委員会における審議状況の概要に関する資料が配付された。
  - 1.2 第18期第7回地質科学総合研究連絡委員会報告(2003年3月11日開催。田中委員長)。地質科学総合研連の役割と構成(次期は第四紀専門委員会と地質環境専門委員会(仮称)とで構成する)などが審議されたとの報告があった。
  - 1.3 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会国際対応について報告書を提出した(田中委員長)。
  - 1.4 第18期の「日本学術会議の自己評価」として本研究連絡委員会の自己評価を提出した(田中委員長)。
  - 1.5 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会報告を提出した(田中委員長)。
  - 1.6 「環境学における地球化学のありかた」を,本研連の対外報告としてとりまとめて発表した(田中委員長)。
2. その他
  - 2.1 2003ゴールドシュミット国際会議の申込状況などの報告があった(田中委員長)。

#### 審議事項

1. 平成16年度科学研究費補助金の審査委員候補者の

#### 推薦

- (1) 推薦依頼：本研連は,分科「地球惑星科学」の第2段審査委員1名については3倍の審査委員候補者を推薦し,細目「地球宇宙化学」の第1段審査委員3名については2倍の審査委員候補者を推薦する。昨年と同じく18学協会へ推薦依頼を行った。その際に,日本地球化学会には,第1段審査委員候補6名,第2段審査委員候補3名を,それ以外の学協会には第1段審査委員候補1名,第2段審査委員候補1名の推薦を依頼した。
  - (2) 第2段審査委員候補の選考：全候補者13名を分野A(固体地球関係)とB(大気・水圏・生物圏関係)に分けた後に,候補者3名を選出した。選出にあたっては年齢や同一の機関に片寄らないなど,審査委員候補者の推薦に係る留意事項に従った。
  - (3) 第1段審査委員候補者の選考：学会の推薦順位に従い,上位と下位に分けた後,全候補者18名を分野A(固体地球関係)とB(大気・水圏・生物圏関係)に分け,候補者6名を選出した。選出にあたっては,審査委員候補者の推薦に係る留意事項に従った。
2. 第19期への引き継ぎ事項を審議した。本研連の定数が19期からは1名減の11名となる。日本学術会議会員1名以外の10名は学協会等からの推薦で,19期について,その内訳は次のとおりとした。日本地球化学会5名,日本地質学会1名,日本鉱物学会1名,日本岩石鉱物鉱床学会1名,日本化学会1名,地球物理研連(固体系)1名。

### 第18期第4回惑星科学専門委員会議事録

日時：2003年5月29日(木) 12:30~13:30

場所：ホテルグリーンタワー幕張「楼蘭」

出席者：土山・本蔵・山本(以上委員),中澤(前委員・委員長)・水谷・香内・塚本・加藤(以上オブザーバー)

#### 議事

##### 1. 審議事項

###### 新委員選出の経緯

中澤前委員長より,個人的な都合により委員長を辞任したい旨またそれにより定数3のうち,日本惑星科学会選出の委員枠が無くなることから新しい委員を選出していただく必要があった旨の説明があっ

た。

#### 新委員長選出

委員 3 名の互選により、山本哲生氏が新委員長に選出された。

これに伴い、地物研連の委員として中澤に替わり山本氏が着任する旨、5月30日開催の地物研連に報告する。

## 2. 報告事項

### 新研連設置

来期(19期)からの学術会議各研究連絡委員会の体制がほぼ決まった。関連分野に関しては、地球物理学研究連絡委員会傘下の6研連は3研連にまとめられ、旧来の研連は全て専門委員会となる。また、現在の惑星科学専門委員会は地物研連の傘下に入らず、委員定数6の独立研連となる。総合科学技術会議が日本学術会議本体の見直し勧告を行ったことから長期的には流動的である。19期の始まる10月までには新研連の人選を行う必要がある。

#### 第8回地球物理学研究連絡委員会

・地物研連主催のIUGGについて各種の報告があった。当初予定したほど寄付が集まらず、資金的な困難が予想されること、またSARSの影響などが報告されたが、概ね準備は順調に進んでいる。

・科研費審査委員の選出について検討した結果、大筋として前年度通りの推薦方法とすることを確認した。

#### 研究費調査とりまとめ

一昨年、昨年と科学研究費に関するアンケートを実施してきたが、合理的な回答が得られていない。山本新委員長のもとで引き続き検討していただきたい旨中澤よりコメントがあった。

## 3. その他

下記のような意見交換を行った。

- ・現在の学術会議会員(現在210名)構成に新しいカテゴリー「連携会員」が加わることとなっているが、連携会員は分野の代表としてではない選出過程を経てくることとなっており、他分野との競争について、体制の立て直しが必要ではないかとの意見が上がっている。
- ・鉱物学会と岩鉱学会の統合が議論されている。
- ・総合科学技術会議から日本学術会議への勧告に対し、反論を行っているが、議論が幅広すぎるため、説得力を持たない。

## 岡山大学理学部地球科学教員の公募

このたび下記要項により教員を公募することになりました。つきましては、貴機関関係者への周知方よろしくお取り計らい下さいますようお願い申し上げます。

### 記

1. 職名・人員：教授 1名
2. 採用分野：地球物質循環学(循環地球化学分野)
3. 着任時期：決定後できるだけ早い時期
4. 応募資格：
  - (1) 博士の学位を有すること
  - (2) 大気圏・水圏・地圏における物質フラックス・循環、各圏の進化発展過程、地球環境等に関する教育研究を、熱意を持って推進できる方
5. 担当予定授業科目：
  - (1) 教養教育科目：地学及びその他の関連科目
  - (2) 学部及び大学院自然科学研究科(博士前期課程、博士後期課程)授業科目：地球化学とその関連分野の専門科目
6. 提出書類：
  - (1) 履歴書：(a)学位明記、(b)写真貼付、(c)署名捺印(市販の用紙を使用のこと)
  - (2) 研究業績目録(審査付き原著論文、総説、著書、その他の報告に区分して記載)
  - (3) 主要研究業績10編の別刷(最近5カ年間の業績を主体に代表的なもの;コピー可)
  - (4) 研究業績の概要(2,000字程度)
  - (5) 教育経験がある場合は、これまでの教育活動の概要(1,000字程度)
  - (6) 採用された場合の研究と教育に対する抱負(1,200字程度)
  - (7) 応募者について意見を伺える方2名の氏名、所属、連絡先  
提出書類は、履歴書を除き全てA4判横書きとし、それぞれ別葉とする。なお、各葉に氏名を明記すること。
7. 公募締切：平成15年7月31日(木) 必着
8. 書類送付先：  
〒700 8530 岡山市津島中三丁目1 1  
岡山大学理学部地球科学教室 柴田次夫宛  
(封書に「応募書類在中」と朱書のうえ、書留で送付のこと)

9. 照会先：岡山大学理学部地球科学教室 柴田次夫  
Tel：086 251 7881

E-mail：shibata@cc.okayama-u.ac.jp

10. その他：

公募締め切り後の選考段階で、面接あるいは講演会等を行なうことがあります。

### 第47回粘土科学討論会のお知らせ

- 1) 主催：日本粘土学会  
2) 共催（予定）：資源・素材学会，資源地質学会，ゼオライト学会，地盤工学会，日本化学会，日本火山学会，日本原子力学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本鉱物学会，日本セラミックス協会，日本セラミックス協会原料部会，日本高分子学会，日本第四紀学会，日本地学教育学会，日本地球化学会，日本地質学会，日本土壤肥料学会，日本熱測定学会，日本ペトロロジー学会，農業土木学会（50音順）

3) 期間：平成15年9月24日(水)～26日(金)

4) 会場：広島大学大学院理学研究科講義棟（東広島キャンパス）

〒739 8526 東広島市鏡山1 3 1

Tel：0824 24 7466（北川）

5) 日程：

- |       |             |          |
|-------|-------------|----------|
| 9月24日 | 9：00～12：00  | 口頭発表     |
|       | 13：00～14：00 | 特別講演     |
|       | 14：00～17：30 | シンポジウム   |
|       | 18：00～      | 懇親会      |
| 9月25日 | 9：00～11：00  | 口頭発表     |
|       | 11：00～12：00 | 日本粘土学会総会 |
|       | 9：00～12：00  | ポスター展示   |
|       | 12：00～14：30 | ポスター討論   |
|       | 14：30～17：30 | 口頭発表     |

6) 講演：

A. 特別講演

題目：「韓国の粘土鉱床」(仮題) 黄辰淵(釜山大)

B. 平成15年粘土科学討論会シンポジウム

■粘土圏の空間分布

- |             |                                |
|-------------|--------------------------------|
| 14：00～14：35 | 地球表層における粘土圏の役割<br>(仮題)         |
| 14：35～15：10 | 地下深部における生命圏粘土圏<br>相互作用(仮題)     |
| 15：10～15：45 | 宇宙空間における粘土鉱物の分<br>布とその存在意義(仮題) |

15：45～15：55 休憩

■粘土鉱物のナノ解析手法

15：55～16：30 電子顕微鏡による層状珪酸塩の  
ナノ解析法(仮題)

16：30～17：05 分子シミュレーションによる粘  
土鉱物のナノ解析法(仮題)

■17：05～17：45 総合討論

7) 見学会：

日時：平成15年9月26日(金)

場所：呉市中国工業技術研究所(瀬戸内海大型水理  
模型・施設の見学)，東広島市西条粘土採掘  
場および西条酒蔵見学

参加費：5,000円/人

申込：講演申込みの際に申し込まれるか、官製はが  
きに参加者氏名・所属を記入して、下記申込  
先にお送りください。

8) 会費：

参加登録料；会員(共催学会員を含む)2,000円，  
学生会員1,000円，非会員3,000円  
講演要旨集代；3,000円  
懇親会費；一般5,000円，学生3,000円

9) 宿泊案内：

東広島市内に宿泊をお考えの方：宿泊施設が多く  
はありませんのでお早めにご予約ください。

10) 会場への交通：

JR 西条駅前からバス「広島大学」行に乗り，「広  
島大学・中央口」バス停で下車。広島バスセンター  
から，広島大学行きの高速バス(グリーンフェニッ  
クス)が1日15往復運行。

11) 連絡先：

〒739 8526 東広島市鏡山1 3 1

広島大学大学院理学研究科・地球惑星システム学専攻  
北川隆司

Tel：0824 24 7466，Fax：0824 24 7466

E-mail：e-mail：kitagawa@sci.Hiroshima-u.ac.jp

E-mail：jige@hiroshima-u.ac.jp(地下)

### 第14回大気化学シンポジウム

主催：名古屋大学太陽地球環境研究所

協賛：日本地球化学会ほか

日程：2004年1月7日(水)～9日(金)

場所：豊川市民プラザ(愛知県豊川市諏訪3丁目302)

内容：地球大気対流圏および成層圏における化学・輸  
送過程についての観測・実験・モデリング・衛

星データ解析などによる研究結果を口頭ならびにポスター発表により議論する。

発表申込：発表を申し込まれる方は、氏名、所属、連絡先、発表題目ならびに発表の概要（200字程度）、発表形式（口頭かポスター発表）を下記申し込み先まで E-mail または Fax でお申し込み下さい。

発表申込締切：2003年11月21日(金)

参加登録費：無料

懇親会：1月8日(木) 18時より。会費6,000円（予定）

申込、問合せ先：名古屋大学太陽地球環境研究所内  
大気化学研究会事務局

〒442 8507 豊川市穂ノ原3 13

Tel : 0533 89 5160, Fax : 0533 89 5593

E-mail : taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

詳細は HP

<http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ste-www/1/div1/taikiken/>をご覧ください。

## 書評

「アフリカ大陸から地球がわかる」

諏訪兼位著，岩波ジュニア新書 431，定価740円  
2003年4月

岩波ジュニア新書は時々地球科学に関する解説書を発行しており（例えば地球がわかる50話，島村英紀；地磁気逆転X年，綱川秀夫），私は愛読者の一人であるが，今回また興味あるテーマの一冊が刊行された。それは諏訪兼位氏の「アフリカ大陸から地球がわかる」である。著者はアフリカ大陸の地球科学研究の第一人者であり，1962年のエチオピア地溝帯の調査以来，40年にわたってアフリカ研究に携わってきた。本書はアフリカ大陸について著者の思いや魅力を語った，ジュニア向けのアフリカ大陸解説書である。

本書は五章からなる。第一章は著者がアフリカ大陸の調査を始めた動機や，1962年の最初のアフリカ調査の様子が苦勞話をまじえて述べられている。ここでは地質調査の方法が初心者向けにかなり詳しく解説されている。また多くの探検家をとりこにしたナイル川

や，恐竜の天国といわれるアフリカ大陸の魅力が語られている。第二章は先カンブリア時代のアフリカ大陸の解説である。最初に地球の年齢観の変遷についてふれ，カラハリ剛塊を例に始生代，原生代のアフリカ大陸についての説明が続く。またアフリカ最古の化石や，黒田和夫教授が予言した天然原子炉などのトピックスがとりあげられている。そして先カンブリア時代末期に起こった汎アフリカ造山運動の話が続く。第三章ではダイヤモンドとアフリカ大陸との関係が述べられている。ゴンドワナ大陸の分裂により生じた深部に達するひび割れに沿ってキンバリー岩が急上昇して，ダイヤモンドを地表にもたらした経緯がわかりやすく語られている。そしてダイヤモンド発見物語が紹介されている。第四章はアフリカ大地溝帯の話である。東部アフリカを6,000 km にわたって南北に縦貫する大地溝帯の形成，発展過程が詳しく解説されており，地溝帯に産出するカーボナタイトの成因，地溝帯で始めて発見された初期人類の化石とその後の人類起源の研究の歴史が興味深く述べられている。第五章は砂漠化の問題の解説である。サハラ砂漠の歴史と，サハラ砂漠の南縁に位置するサヘル・スーダン地帯における砂漠化が，自然現象だけでなく農地の不適切な使用によっても起こることが述べられている。そして最後に砂漠化防止のための研究紹介がなされている。

著者は1997年にアフリカ大陸の解説書として「裂ける大地アフリカ大地溝帯の謎（講談社選書メチエ）」を出版した。これは一般の読者を対象として書かれたものである。これに対して本書はジュニア向けにわかりやすい語り口での述べられており，専門用語の解説も末尾にまとめてある。しかし全般的にかなり専門的であり，ジュニア向けとはいえ内容は高校地学の副読本，あるいは大学教養地学の参考書として十分使用に耐えるものである。著者はアフリカ調査の副産物として，歌集「サバンナをゆく」，画集「スケッチブック」を刊行し，幅広い趣味の一端を紹介した。本書のカバーの絵もこの画集に納められている1枚で，ケニヤ，ツアボ国立公園の雄大なサバンナ風景である。

（柴田 賢）

### 鳥居基金募集要項の訂正について

皆様のお手元に届いている地球化学会員名簿号 (Vol 37, 特別号, 2003), 107ページに誤りがありました。

ご迷惑をおかけ致しますことをお詫び申し上げますとともに以下のように訂正させていただきます。会員の皆様のご理解をいただけますようよろしくお願い申し上げます。

#### (誤)

##### 5. 申請手続

応募者は、別紙様式の申請書 ((1)および(2)) を所定の期日までに日本地球化学会に提出する。

#### (正)

##### 5. 申請手続

応募者は、別紙様式の申請書 ((1) - A または(1) - B、および(2)業績リスト (発表論文、様式自由)) を所定の期日までに日本地球化学会に提出する。

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー(マックもしくは Dos/V いずれでも結構です)での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2003年12月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は10月下旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

#### 編集担当者

米田成一

〒169 0073 東京都新宿区百人町3 23 1  
国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03 3364 7142, Fax : 03 3364 7104,

E-mail : s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351 0198 埼玉県和光市広沢2 1  
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之 (ホームページ)

〒156 8550 東京都世田谷区桜上水3 25 40  
日本大学文理学部

# 地球惑星科学関連学会 連絡会ニュース

No. 28

(2003年7月)

- [1] 2003年合同大会を終えて
- [2] 2004年合同大会のお知らせ
- [3] IUGG2003 第23回国際測地学・地球物理学連合総会速報
- [4] 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ(その4)
- [5] 2003年度地球惑星科学関連学会長懇談会(拡大連絡会)議事録(案)

2003年合同大会は盛況のうちに終わりました。合同大会に続き、IUGG 総会も成功裡に終了しました。また、ゴールドシュミット国際会議の日本開催がいよいよ9月に迫っています。今号ではこれらの報告と、来年の合同大会の予定をあわせてお知らせします。

## [1] 2003年合同大会を終えて

### 1. 総括

2003年合同大会実行委員長 清水 洋

幕張メッセ国際会議場で開催された2003年地球惑星科学合同大会は、2568名の参加のもと、1865件の発表があり、活発な議論がなされ、成功裡に終わりました。参加された皆様及び関連学会の方々に厚くお礼申し上げます。

2003年は、6月末からのIUGG2003年総会(札幌)、9月のゴールドシュミット国際会議(倉敷)などいくつかの地球惑星科学関連の国際会議が日本で開催され、日本の地球惑星科学の飛躍の年です。しかし、これらの国際会議への皆様の参加と代々木からの会場変更のために、合同大会での発表件数や参加者が大幅に減少するのではないかと心配をしていました。確かに、参加者及び発表件数は、過去最多を記録した2002年合同大会と比較すると8%程度減少しましたが、2001年合同大会を上回る数でした。合同大会が、地球惑星科学の学問分野において重要な位置を占めていることを示す数字だと思います。個人的には、合同大会がスタートした1990年とそれに続く1991年以来、約10年振りの合同大会運営への関与でしたので、この間の合同大会の発展には感慨深いものがあります。参加された皆様による、質の高い研究発表と活発な議論が、合同大会を発展させてきた大きな要因だと思います。

1990年及び1991年の参加者と発表件数を、古いメモから探し

出しました。90年は約1200名・766件、91年は約1400名・781件でした。今回の参加者数・発表件数と比べた時に、合同大会運営を担当されてきた方々の献身的な御努力が、本大会を支えてきたことを痛感致します。2001年からの運営機構方式により、継続的な合同大会運営を目指してきました。そして幕張メッセ国際会議場での開催により、今後も安定した会場確保が可能となりました。また、今回から連絡会会長が合同大会委員長を兼ねることになりました。この体制のもとでの、各学会・参加者・運営担当者の相互の率直な意見交換が、さらに実りある合同大会を実現させていくものと信じております。

合同大会が皆様の研究及び地球惑星科学の発展の場となりますよう、引き続き積極的な御参加をお願いし、お礼の挨拶とさせていただきます。

### [ 大会概要 ]

会期 : 2003年5月26日(月)-29日(木)

会場 : 千葉幕張メッセ 国際会議場

- 共催・協賛学会数 19学会
- 後援団体 32団体
- 参加者数 2568名  
事前参加登録者数 1929名  
(一般 1140名、学生 555名、一日券 234名)  
当日参加登録者数 520名(一般/学生 235名、一日券 285名)  
見学者学生 95名、シニア(70歳以上) 24名
- 論文投稿数 1865件
- セッション数 83件(ユニオン:1、レギュラー:57、スペシャル:24、特別公開:1)
- 会場数 12
- アルバイト延べ 154名 地元ボランティア 延べ 28名
- 団体展示 19団体(21ブース)
- 書籍・出版団体展示 14団体(16ブース)  
株式会社 朝倉書店      インフォレーダー(株)  
エルゼビア・ジャパン(株)      海洋出版(株)  
鹿島出版会      共立出版(株)  
古今書院      株式会社 新日本ファミリークラブ  
株式会社 テラハウス      テラバブ  
(財)東京大学出版会      日本地質学会  
株式会社 渡辺教具製作所  
ユナイテッド・パブリッシャーズ・サービス社
- 会合 53会合
- 取材プレス数 20社

## 2. 企画局報告

2003年担当責任者 大村 善治

昨年に引き続き今年も、「団体展示」の企画・広報、関連団体へ合同大会「後援」を依頼、及びプログラム局と連携してユニオンセッションの企画・開催のサポートを行った。さらに従来一般公開の「青少年向けセミナー」に代えて、「特別公開セッション」として地学教育開

題を取り上げて、一般、特に小中高の先生方の参加を呼びかけ、合同大会を盛り上げるべく諸活動を行った。

#### ●後援

2年目を迎える企画で、大会の裾野を広げ、より充実し確固たる大会への発展を目的としている。「後援」依頼の内容は、①経済的負担は求めない。②後援者としてポスター・プログラム・ホームページに団体名の記載。③(可能な限りで)団体展示への出展依頼、の3点である。地球惑星科学関連の機関への依頼の他に、2003年大会では地学教育について特別公開セッションを開催するために、教育関係者の参加をより多く得られるよう、文部科学省へも後援の依頼をした。結果、32団体より快諾を得ることができた。これは昨年より12多く、合同大会が関連団体へ広く受け入れられたと判断できる。

#### [ 主なスケジュール ]

02/09月 依頼先リスト作成、依頼書項作成、  
10月 募集・勧誘開始、案内DM発送  
11-12月 後援団体決定  
03/01月 ホームページにて後援団体公開  
(以降順次、ポスター・大会プログラム等へ掲載)

#### [ 後援団体一覧 ]

文部科学省、日本学術会議、  
国土交通省海上保安庁海洋情報部、 国土交通省気象研究所、  
国土交通省気象庁地磁気観測所、 国土交通省国土地理院、  
文部科学省宇宙科学研究所、 文部科学省統計数理研究所、  
文部科学省高エネルギー加速器研究機構、  
文部科学省国立極地研究所、 文部科学省国立天文台、  
北海道立地質研究所、  
(独)建築研究所、 (独)航空宇宙技術研究所、  
(独)国立科学博物館、 (独)国立環境研究所、  
(独)産業技術総合研究所地質調査総合センター、  
(独)土木研究所、 (独)農業工学研究所、  
(独)物質・材料研究機構、 (独)防災科学技術研究所、  
宇宙開発事業団、 海洋科学技術センター、 金属鉱業事業団、  
核燃料サイクル開発機構東濃地科学センター、  
固体地球統合フロンティア研究システム、  
(財)宇宙環境利用推進センター、 (財)深田地質研究所  
(財)資源・環境観測解析センター、  
(財)地震予知総合研究振興会、  
(財)地球科学技術総合推進機構、  
(社)全国地質調査業協会連合会

#### ●団体展示

大会開催中、全期間を通じて利用できる展示ブースで、この研究分野にまつわる包括的情報発信の場を目指している。出展数は19団体21ブースであった。前回まで、会場の関係でブースに人が流れずに、出展者の不満があったが、今大会では、会場のメイン2Fの中央ロビーで開催できたため、多くの人を集めることができ盛況であった。

#### [ 主なスケジュール ]

02/10月 会場決定、募集要項作成、募集対象絞り込み開始  
11月 募集・勧誘開始、案内DM発送  
03/01月 応募一次締切、調整、追加募集  
02-03月 最終締切、出展者決定、出展要綱配布  
03-05月 会場準備手配(総務局)へ

#### [ 出展者一覧 ]

アーキアンパーク計画 応用地震計測(株)  
海洋科学技術センター-固体地球統合フロンティア研究システム  
海洋科学技術センター-地球深部探査センター  
(株)IHI エアロスペース (株)勝島製作所  
(株)近計システム (株)地球科学総合研究所  
(株)レッツェ (財)地球科学技術総合推進機構  
東京大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻  
東北大学大学院理学研究科地学専攻  
(独)産業技術総合研究所地質調査総合センター  
(独)通信総合研究所 (独)防災科学技術研究所  
白山工業(株) 文部科学省宇宙科学研究所  
文部科学省国立天文台 ALMA計画 (有)オプティマ

#### ●特別公開セッション

##### 『地学教育の昨日・今日・明日』

—地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか?—

5月26日(月)9:00-15:15 (以下講演順)

- ・「地学教育に対する私見」 木村龍治(前東京大学海洋研究所)
  - ・「地学選択者数の減少と魅力的な教科書」  
山智雄(開成中・高等学校)
  - ・「小学校理科教育におけるインターネット活用と体験的な学習のあり方—子どもたちの印象に残る授業づくりを目指して—」  
手代木英明(新宿区立余丁小学校)
  - ・「中学生の地学に対するイメージ」  
関谷奇雄(横浜国立大学附属鎌倉中学校)
  - ・「高等学校における地学教育の現状と未来」  
坪田幸政(慶応高等学校)
  - ・「アメリカの地球惑星科学/地球環境科学の研究戦略と初中等教育戦略—top downとbottom upの相互作用」  
木村学(東京大学大学院理学系研究科)
  - ・「21世紀の地学教育について:大学研究者の立場から」  
淡路敏之(京都大学大学院理学研究科)
  - ・「21世紀の理科教育と地学」  
西田篤弘(宇宙科学研究所名誉教授)
- 例年の「青少年向け」セミナーに代えての公開企画である。子供たちの「理科離れ」に対し、文部科学省においても、各種対策が行われ始めているが、特に高等学校での地学履修者の減少は、憂えるべき現状である。この状況の中、「地学はその学問分野が多岐にわたるため、関係者間の情報交換が不足している」という多くの声が聞かれる。本セッションは、「教育者と研究者が一堂に会して、地学教育の現状について共通理解を深め、21世紀に求められる地学教育の在り方を議論する機会の提供」を目的としている。

参加者は約250名で、ほぼ1日かけての長時間のセッションにも

かかわらず、多くの参加者を得ることができた。研究者だけでなく、小中高の教育現場の先生、教育機関担当者、文部科学省担当者、教材業者の方々などが、講演に熱心に耳を傾け討論できたことは、大変意義があったと思われる。主な意見として「地学離れは大学受験制度に問題がある」、「きちんと指導できる教員が少ない」、「教科書が不十分」、「理科の科目自体の見直しが必要ではないか」等が出されたが、この教育問題は継続課題となり「地学教育」委員会も立ち上げることになった。尚、この公開セッションの様子は同日夕刻の千葉テレビのニュースで放映され、上記の主な意見が報道された。

開催にあたり配慮した点は、小中高校の学校教員の方が参加しやすいよう、①事前に希望者へ出張依頼書を発行、②文部科学省や教育委員会の後援を受ける、③レギュラーセッション「地学教育」同日開催など、であった。しかし、現場を抱える教員の方にとっては、平日の参加は負担であり、地学教育を扱う場合は日曜開催も検討する必要性を感じた。

また、以前より要望のあった公開企画の講演資料については、今回初めて特別に予算をとった。コンビナーや、寄稿者には多大な労力負担があったが、90頁の立派な冊子が完成した。この冊子は公開セッション会場だけでなく、受付などに置き、自由に持ち帰ってもらった。1000以上配布できたので、大会参加者の約半数がこの冊子を持ち帰った計算になる。本セッションの目的でもある「地学教育の現状」の共通理解を深めるための、広報媒体として一役を買ったと思われる。

#### ●広報活動

- ① ポスター作成・配布：今回は、ポスターを製作するにあたり、デザインの公募を行なった。初めての試みであったが15点あまりの力作が集まった。運営機構コアメンバーにより優秀作を選定し、A2サイズ300部、A3サイズ100部作成した。配布先リストの見直しをし、関連専攻のある大学・研究機関(125)、都道府県(主要都市含む)教育委員会(58)、都道府県私学中学高等学校協会(47)、地学関係教員養成課程のある大学(53)、スーパーサイエンス校や近隣高校(48)、マスコミ(20)等へ郵送し、大会及び特別公開セッションへの参加を呼びかけた。
- ② マスコミ広告：読売、産経の各新聞で「特別公開セッション」の広告が掲載された。この他、開催地千葉県の支援団体千葉コンベンションビューローより千葉県における広報活動の協力(JR 駅配布タウン紙への掲載4月5月、千葉TV、ラジオ放送)があった。
- ③ 当日の取材記者への対応：基本的に前大会通りで、「取材方法指示書」を準備して、1F 受付カウンターで記名、名札着用の上入場してもらった。来場は20社程度であった。特別公開セッションのTV取材等の対応は企画局が行った。又、大会初日の夕刻に、東北地方に大きな地震が発生したため、コメントを求めてマスコミの問合せが集中した。一部断つても、夜遅くまで会場に居残る新聞社がいたというハプニングがあったが、その他大きなトラブルはなかった。

#### ●今後の課題

- ・ 団体展示ブースは、概ね出展者にも好評で満足してもらえた。内容的にも経済的にも確固とした大会にするために、もっと盛り上げたい。大学関係機関の参加が少ないように思われる。
- ・ 特別公開セッションの開催をきっかけに「地学教育」委員会が発足した。メーリングリストを立上げて既に情報交換が行なわれている。連絡会の下部組織であるが、意義ある委員会になるよう、運営機構でもサポートをしていく必要がある。
- ・ 広報については、繁忙な時期が他局と重なり、人手不足のため十分な活動がなかなかできない。宣伝したい内容によって、広報先、活動時期・方法などを再検討し、効果的な活動を展開したい。また、広報活動する中で、大会の略称、ロゴマーク、バナーなどの必要性を感じた。

#### 3. プログラム局報告

2003年プログラム委員長 原 辰彦

2003年大会はセッション数83(特別公開セッションを含む。1コマ1時間半のコマ数にして171)、総投稿数1865(オーラル1071、ポスター794)で、2002年大会と比べると若干減ったものの、過去数年並みの規模でした。約1ヵ月後にIUGGが開催されたことを考えると、盛況であったと思います。セッションコンビナー、プログラム委員、そして大会に参加された皆様のご協力に厚くお礼を申し上げます。

2003年大会は過去2年の大会を踏襲し、セッション区分としてレギュラー、スペシャル、ユニオンの3つを設けました。ユニオンセッションは今回は公募のみとし、「計算が開く地球科学の明日」を採択・開催致しました。

レギュラー化を希望されたセッションについては、過去の実績に基づいてプログラム委員会で検討・決定致しました。レギュラーセッションには(単、複数)学会提案のほか、研究グループ提案のものも増え、その提案母体が変わりやすくなりましたので、この点を整理し、プログラム委員会で情報を共有するように致しました。

投稿システムにつきましては、締切間際にアクセスが集中し、システムが反応しなくなる事態が起きまして、皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。投稿システムにつきましては、情報局と協力し、改善を図りたいと考えております。

プログラム編成につきましては、2002年大会の方式を踏襲する方針でしたが、会場が国立オリンピック記念青少年総合センターから幕張メッセ国際会議場に変更になり、いくつかの点を変更しました。

大会期間が5日から4日になり平行セッション数は12に限定されていることから最大限可能なオーラル講演数が2002年大会よりも減りました。そのためにオーラル発表を希望された方すべてのご要望にお応えすることができませんでした。この点につきましてセッションコンビナー及び投稿者の皆様のご理解・ご協力に感謝致します。

また、2002年大会ではポスターの掲示時間を昼から翌日の昼とし、最終日にコアタイムを設けませんでした。今回は掲示時間を朝か



ら夕方コアタイムまでとし、4日すべてにコアタイムを設けました。最終日の発表者の方々にとって不利益にならないように、セッション数は4日間で均等になるように工夫致しましたが、東京近郊以外の参加者の方にはご不便をおかけしました。この点につきましても、参加者の皆様のご理解に感謝致します。

2004年大会の大会期間は現時点でまだ確定しておりませんが、今回の経験を基にして、他局と協力し、よりよい大会の実現を図りたいと考えております。今後も皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願ひ申し上げます。

#### 4. 情報局報告

2003年担当責任者 竹内 希

現行のJCOM社製のWeb運営システムが導入されて5年目の合同大会となりました。参加者2500人以上を誇る合同大会運営を、わずかな人数のスタッフで何とか運営できている現実を考えれば、電子化システムの導入は成功であったと言えると思います。しかしまだ不具合対策が完全ではなく、ユーザーから苦情が寄せられ、事務局がその対応に追われてしまうのも残念ながら実状でした。不具合解消に時間がかかる原因は、過去の失敗を活かしシステム改善につなげるプロセスに、さらなる改善の余地があるからと考えられます。本年度の情報局はこのスキームを作ることを重要課題として位置づけました。

昨年度までの不具合対応は、根本的な原因究明がないまま対処療法で終わらせることがありました。例えばユーザーから予稿集原稿の入力ページが正しく表示できないといった苦情が来ても、JavaScriptのどの関数が不具合の原因になっているか等の検証を行えないまま、ユーザーにブラウザのバージョンを上げることをお願いするといった類の対処で終わってしまうことがありました。この方法では真の省力化を実現するシステムの完成に時間を要してしまいます。

そこで本年度は、JCOM側にシステムの動作保証条件をまず提示してもらい、動作保証条件を満たしながら発生した不具合に対しては、その原因究明と根本的な対処を行い、情報局に報告してもらうようにしました。予稿集投稿締切の前日まではシステム不具合に起因する苦情はあまりなかったのですが、締切日にシステムダウンを起こしてしまい、皆様には多大なご迷惑をおかけしました。実メモリ不足に起因する応答の劣化が原因であり、来年度以降はシステムのパワーアップにより問題解決をはかるとの説明を受けております。しかしメモリ不足が万が一ソフトのバグに起因するものであれば、来年度以降も再発する可能性がないわけではありません。再び皆様にご迷惑をかけることがないよう、来年度の情報局長にこの点の確認をお願いするつもりです。

最後に、他局とともに、事務局の方々には大変お世話になりました。改めてお礼を申し上げます。

#### 5. 財務局報告

2003年担当責任者 中村 正人

2003年度合同大会は会場を幕張メッセに移したため、2002年大会と比べて、会場費で400万円、音響、映像設備費で300万円の支出増加となった。これを補うため、展示ブースの拡大による収入増を計画し、また事前割引率の縮小、アルバイト代の値下げ、事務局経費の削減を行った。

一月遅れでIUGGが開催され、そちらへの参加による合同大会への参加者数の減少が懸念されたが、実際にはほぼ同数の参加者が得られた。最終的に6月30日の会計は収入32,019,782円、支出32,470,356円となり450,574円の赤字となった。この赤字により繰り越されてきた金額は前年度の15,232,201円から14,781,627円となるが、合同大会の運営に支障をきたすものではない。

2004年度は大会期間を5日間に延長するためさらに多くの会場費、設備費が必要となる。これを補うためにはより多くの研究者、学生の参加が望まれる。各主催学会に置かれてもより一層の合同大会への参加を奨励していただきたい。

##### <収入>

2002 繰越金	15,232,201
投稿料	4,364,000
参加料	
（事前）1916件（一般：1369、学生：547）	16,869,000
（当日）520件（一般：417、学生：103）	4,530,000
差額返金	30,000
手数料	33,000
CD-ROM 販売	163,000
団体展示	4,550,000
出版展示	480,000
諸学会会場費	797,500
学会受付費	40,000
学会長懇談会費	110,000
雑収入	53,010
利息	272
<b>&lt;収入計&gt;</b>	<b>¥47,251,983</b>

##### <支出>

大会当日費用	
幕張メッセ国際会議場 会場使用料	7,548,912
音響設備費	50,400
映像設備費	2,129,253

ポスター・団体展示会場設営費	1,666,350
団体展示会場電気設備工事費	220,500
アルバイト代金・事務局日当	2,566,618
大会中滞在費	238,250
講師謝金(交通費)	39,120
保育室援助	65,040
大会雑費(コピー代)	42,000

#### JCOM 関連

受付(人件費、用具)	320,000
登録処理経費	1,461,300
運営管理費	1,550,000
ホームページ製作費用 (プログラム開発、WEB 開発、システム運用管理)	2,700,000
消費税	468,568
値引き	-625,118

#### 印刷費・郵送費

プログラム印刷費(570×2500)	1,425,000
CD-ROM 製作費(620×2500)	1,550,000
封筒印刷費 [請求書、プログラム発送用等]	162,500
郵便振込用紙(25×2200)	55,000
ネームカード(65×2270)	147,550
請求書・プログラム・CD-ROM 郵送費	585,200
クリアファイル制作費	292,500
冊子代	365,400
ポスター製作費	213,000

#### 運営機構経費

事務局員給与	5,393,733
事務局員交通費	377,510
事務局員国民保険その他	345,900
他局交通費	186,720
通信費(振込手数料、電話代、郵便代)	403,368
事務消耗品費	190,505
備品代	109,004
その他雑費	6,918
連絡会経費	97,355

学会長お弁当代	37,500
返金	84,500
支出小計	¥32,470,356
繰越金額	¥14,781,627
<支出計>	¥47,251,983
収支	¥-450,574

## 6. 総務局報告

2003 年担当責任者 岩上 直幹

会場を代々木青少年センターから幕張メッセに移した結果、会期前・会期中のいずれについても、総務局の作業は大幅に減った。また、これまで悩まされてきた代々木会場特有の規制から開放され、自然な運営が可能となった。

これまでの会期前の作業としてはポスターボード・ブース材・AV 機材の手配、電源工事、食堂業者との折衝などがあったが、今回はいずれも現場部分にはメッセがあつたため、総務局は指示をただだけで済むこととなった。また、これまでの会期中は代々木会場特有の AV システム(PC が正常動作しないと何もできない)に起因するトラブル対策に忙殺されたが、今回は PC を介さない単純システムとなったため、アルバイトの訓練も不要となり、AV 関係のトラブルはほとんど起きなかった。大きな会場が使えたため、「狭い」と悪評の高かったポスターも、間隔をこれまでの最低レベル 2.5m から余裕レベル 3.5m に改善できた。また多くの手間を要してきた宿泊関係、特にユースホステルタイプの扱いから開放されたことも大きかった。

小トラブルとしては温調・換気の不十分さがしばしば指摘された。代々木会場にはなかったシアター形式の椅子配置そのものに苦情は少なかったが、部屋によっては入り口付近に人が詰まり奥が空いている状態が起きた。次回には、椅子配置の工夫など対策が必要。

代々木会場に比べると部屋数が少なく、全体容量にやや不安がないでもないが、土日也使え、何年先でも専有予約可能なことなど安定要因は多く、しばらくは今年の形を踏襲することが可能であろう。

## [2] 2004 年合同大会のお知らせ

### 1. 概要

●会期:2004 年 5 月 9 日(日)~13 日(木) 予定

●会場:幕張メッセ国際会議場

●費用:投稿料、参加費、

基本的に 2003 年大会に準ずる。見学会部生、70 歳以上無料。

●各種登録開始・締切日(予定)

講演投稿 開始:2004 年 1 月 5 日(月)

締切:2004 年 2 月 6 日(金)

事前参加登録 開始:2004 年 1 月 5 日(月)

締切:2004 年 3 月 12 日(金)

## 2. 「セッション提案」のお知らせ

2004 年大会プログラム委員長 吉田 尚弘

2004 年大会プログラム委員長の吉田尚弘(東工大)です。どうぞよろしくお願い致します。2001 年からの過去 3 回の大会でセッション区分やプログラム編成スケジュールはほぼ回まり、昨年から運営に適切な会場を得ております。2004 年大会は基本的にこれを踏襲し、皆様の活発なご議論、ご提案をいただくことで、より充実した合同大会実現に向けて対応していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

### 【1】プログラム委員会の構成と役割

プログラム委員会についてご説明致します。

- (1) プログラム委員会は、各共催学会選出の委員と運営機構プログラム局員から構成されます。
- (2) プログラム委員会は、提案されたセッションの採択、プログラム日程案の作成を行います(具体的なスケジュールは後述)。
- (3) プログラム委員会は、(2)の作業を行います、最終的な全体調整はプログラム局幹事会(後述)が中立的な立場から責任を持って行います。

運営機構プログラム局員と学会選出プログラム委員は兼任可能ですが、プログラム局幹事会は中立的な立場を保つため、兼任不可です。プログラム委員、プログラム局員のリストは<http://www.epsu.jp/>でご覧になれます。

プログラム局幹事会は 2004 年プログラム委員長に前年度、次年度のプログラム委員長と、分野のバランスを考慮して数名の幹事を加えて、構成します。今年の構成メンバーは、原辰彦(建築研、2003 年大会担当)、吉田尚弘(東工大・フロンティア、2004 年大会担当)、篠原育(宇宙研、2005 年大会担当)、北和之(茨城大・理)、小野高幸(東北大・理)、岩森光(東大・理)です。プログラム編成に関する検討事項はプログラム局幹事会で案を立て、プログラム委員会で検討致します。

### 【2】2004 年大会のセッション区分(案)

2004 年大会は前回までの大会を踏襲し、R(レギュラー)、S(スペシャル)、U(ユニオン)の 3 区分を設けて、プログラム編成を行うことを考えております。

#### Rセッション

5 年間程度セッション名を固定するレギュラーセッションです。2001 年大会で各学会から提案していただいたセッションの他に、レギュラー化を希望され、過去の実績からレギュラー化が適当であるとプログラム委員会が判断したセッションがあります。レギュラー化を希望されるセッションについては、2004 年大会でも過去の実績を基にプログラム委員会で検討させていただきます。また、新規参加の学会に対しては、レギュラーセッションをご提案頂く、もしくは合同大会への参加実績を重ねた上でレギュラー化をご検討いただくなどの対応を考えております。

#### Sセッション

旬の研究テーマを学会横断的に議論するセッションとして、これまで同様に一般から公募します。

#### Uセッション

全学会に関係する話題を取り上げるセッションです。2002、2003 年大会では、運営機構提案セッションと公募などで、3 セッション、1 セッションをそれぞれ 1 日行いました。2004 年大会も同様な方針を考えておりますので、皆様の積極的な応募をお待ちしております。

### 【3】2004 年大会プログラム編成スケジュール(案)

2004 年大会のプログラム編成日程案を以下に示します。

8 月初旬	プログラム委員会再編開始 Rセッション決定 (レギュラー化を希望されたセッションの検討を含む)
9 月初旬～	Uセッション公募開始
9 月初旬～	Sセッション公募開始
10 月中旬	Uセッション採択
10 月末	Sセッション公募締切
11 月中旬	Sセッション採択
1 月 5 日	投稿受付開始
1 月 26 日	早期締切
2 月 6 日	投稿締切
2 月 7 日～	セッション日程、プログラム編成
3 月 1 日	投稿者へ日程時間割通知
3 月 1 日～	プログラム最終調整
3 月 5 日	プログラム編成終了
5 月 9～13 日	2004 年大会

2004 年大会の開催期間は前回大会と比べて 2 週間以上早いので、プログラム編成終了を含むほとんどの日程を 2 週間程度早くしてあります。投稿期間が、年始から開始すること、編成・通知・印刷・送付日程などから、例年より短期間になることにご注意いただき、早めの投稿をお心掛けください。また、大会開催期間を 5 日間と延長する方向で検討しております。

上記のセッション区分案、プログラム編成スケジュール案などはプログラム委員会で検討し、決定していく予定です。その結果につきましては、プログラム委員および運営機構のウェブサイトを通して、皆様にお知らせいたします。来年の大会に向けて、どうぞよろしくお願い致します。

### 【3】IUGG2003 第23回国際測地学・地球物理学連合 総会速報

組織委員会総務幹事 末廣 深

2003年7月11日、アジアで初開催の札幌で6月30日以来2週間にわたったIUGG総会が、幕を閉じ、次回は2007年イタリアのペルージャで再会ということになりました。無事、閉幕を迎えられたこと

は、主催の日本学術会議、地球物理学関連の16学会をはじめ、札幌市、北海道、出展団体、地元ボランティアほか、多数の力が合わさったおかげであり、努力を惜しまなかった方々に深く感謝します。詳しい報告書は別途まとめられますが、ここに速報として、総会の概要をお知らせします。数字については、あくまで確定版ではないことに留意してください。

事前登録のしめきりまでに、4,169名の登録者があり、うち、海外が2,318名でした。実際に総会に参加された方は、約4,150名となりました。会場は IUGG にふさわしく国際的な雰囲気につつまれ、約75ヶ国の参加国数を反映していました。札幌の街にも外国人の姿が目立ったようです。全登録者数は、当初の目標を上回ることができました。ただ、SARS による影響により近隣アジアからの参加が減ったのは、まことに残念なことでした。会期中7月5日には感染地域指定がすべて解除にはなりませんが、これがあと一月早ければと悔やまれます。

札幌ロイトン、厚生年金会館、教育文化会館の3会場で毎日約30のセッションが開かれました。ポスターセッションは晴れた日には屋根が開くという斬新な会場スピカで300以上のスペースを設けました。オーラルセッションが多いという総会の特徴とポスターセッションの充実については課題も残されましたが、余裕あるスペースが確保でき、議論が活発な時間帯も短いながらありました。

今回の総会には、100人を超える日本人コンピーナーの活躍がありました。総会のテーマである「この惑星(ほし)の今:未来への挑戦」による連合セッションは好評で、IUGG が7つの協会を包む傘の役割だけでなく、有機的結合をする軸の役もみごとに演じたと思えます。IUGG のユニークな、かつグローバルな役割の重要性が浮き彫りにされました。また、最終日には、若手研究者の連合セッション「IUGG 科学:その未来」が活況を呈し、各協会の代表選手に日本から2人も選ばれていたことは頼もしく思われました。実際、彼らの提案には耳を傾けるべき内容が多く、公開されているのでぜひご覧下さい(<http://www.iugg.org/reports.html>)。だいじなことは彼らの発表を通して、地球科学の未来を垣間見ることができたことでしょう。

7月2日オープン直後の札幌コンベンションセンターで開催された歓迎式典には、天皇皇后両陛下ご参列のもと、陛下のお言葉、文部科学省政務官挨拶に、首相メッセージがありました。とくに陛下のお言葉(<http://www.kunaicho.go.jp/>)には、聞き入る方々(英仏訳つき)から、賞賛の感想をいただきました。あえて付け加えますと、災害や人命に対するまさに陛下ご自身の思いが込められていた内容です。アトラクションとして北海道大学オーケストラも名演奏を披露してくれました。

展示会場の研究発信ブースにも注目が集まりました。何人もの外国からの参加者から、展示の内容に目を見張ったとの感想を受けました。目的を達することができたのではないかと思う次第です。

今回の総会では、アウトリーチにも力が注がれ、IUGG 参加者の協力により、北海道各地で「出前授業」、市民大学、中学生サミット、ジ

ュニアポスターセッションなど行われ、たいへんな好評をいただきました。地元の新聞では、IUGG という単語が、ふつうに使われるほど親しみを持ってもらえたようです。

今回の総会をもって、河野 IUGG 会長からシャミール新会長(イスラエル)にバトンタッチされました。河野会長の並々ならぬ精力的活動活躍も、総会の成功の重要な要素でした。これを機会に、IUGG の意義を科学先進国としての日本がさらに世界に敷衍することが進められればと個人的に思う次第です。

この総会では、参加者の健康状態を一人残らず管理することになりましたが、みなさまのご協力で問題の発生なく11日間の会期を終了できました。参加して下さったみなさま、支援して下さった方々に深く感謝します。7年間の準備期間から2週間の会期まで思い起こしますと、長くもありましたが、終了した今、日本の地球科学の財産として重大な歴史的基盤が残せたのではないのでしょうか。組織委員会は、しばらく活動を続けますが、今年度中に開催する第3回組織委員会をもって停止することになります。部会長の方々ごころうさま。

#### [4] 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ(その4)

##### ——プログラムの発行——

第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会委員長  
松久幸敬

会議名: 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003)

Website: <http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>

E-mail: [gold2003@ics-inc.co.jp](mailto:gold2003@ics-inc.co.jp)

開催時期: 2003年9月7日(日)~12日(金)

開催場所: くらしき作陽大学(倉敷市)

主催: The Geochemical Society (国際地球化学会)

The European Association of Geochemistry

(欧州地球化学連合)

The Mineralogical Society of America (米国鉱物学会)

日本地球化学会 (The Geochemical Society of Japan)

後援: (独立行政法人)産業技術総合研究所、(学校法人)くらしき作陽大学、倉敷市、岡山県

学協会後援: 20学協会(名称略)

会議の規模: 参加者約1,200名、発表論文数約1,150件(口頭およびポスター)、特別講演、企業展示、バンケット、エクスカージョン

ゴールドシュミット国際会議は、General Symposia 9領域と Special Symposia 53テーマから構成されます。論文発表は、1,150件の申し込みがあり、すでにプログラム編成が終わっています。以下に会議日程の概要を示しますが、論文発表プログラムおよび会議の詳細は、会議ホームページ(<http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>)をご覧ください

ださい。早期割引登録はすでに終了していますが、当日現地での登録も可能です(主催学会の会員割引料金一般 38,000 円、学生 18,000 円)。

9月	午前	午後	晩
7日(日)		登録開始(16時)	アイスブレイク
8日(月)	一般講演/ポスター	同左	ウエルカムレセプション
9日(火)	一般講演/ポスター	同左	
10日(水)	全体会議・特別講演	オプショナルツアー	
11日(木)	一般講演/ポスター	同左	バンケット
12日(金)	一般講演/ポスター	同左	

9月10日(水)午前の全体会議では、授賞式のほか、以下の特別講演が予定されています。

Gast Lecture H. Ohmoto:  
Chemical and biological evolution of the early Earth: A minority report

GSJ Award Lecture I. Kaneoka:  
Terrestrial noble gases A unique indicator for the chemical structure and evolution of the Earth

Goldschmidt Lecture B. J. Wood:  
The principles controlling trace element partitioning in igneous processes

ゴールドシュミット国際会議では、以下のテーマと日程で、若手研究者と学生を対象にしたショート・コースを開催します。詳しくは下記のホームページをご覧ください。

13th V. M. Goldschmidt Conference Short Course on ICP-Mass Spectrometry

<http://www.geo.titech.ac.jp/epss/ss2003/index.htm>

期間: 2003年9月6日(土)12:30 ~ 7日(日)15:00

場所: 岡山テールサ(JR山陽線中庄駅からタクシーで5分)

講師: G. Detlef (ETH, Switzerland), A. Halliday (ETH, Switzerland), T. Fujii (Tokyo U), S. E. Jackson (GEMOC, Australia), K. O'Nions (Oxford U, UK)

ゴールドシュミット国際会議の開催を前に、倉敷市において、以下の二つの中・高校生、一般市民向け公開講演会が開催されます。いずれも入場無料。

(1) ゴールドシュミット国際会議記念倉敷市民講演会「地球と生命のふしぎ」

日時: 2003年8月24日(日) 13:00~16:30

場所: ライフパーク倉敷 大ホール(JR山陽線倉敷駅からバス25分)

内容: 酒井 均 「火星にも生き物は生まれたか?—温泉大好きバクテリアは語る」

風早康平 「火山噴火:その恵みと災害」

野尻幸宏 「地球温暖化、これってこまるの? どうしよう?」

(2) 地球化学市民講座「世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の未来」

日時: 2003年9月7日(日) 10:30~12:30

場所: 暮らし作陽大学1号館(JR山陽新幹線新倉敷駅下車徒歩10分)

内容: 紀本岳志 「瀬戸内海をはかる 観測データが語る豊かな海の未来」

田上英一郎 「海の物質循環を動かす小さな生き物たち」

(連絡先)

第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会事務局

〒305-8567 つくば市東1-1-1 中央第7

産業技術総合研究所 地球科学情報研究部門 富樫茂子 気付

Tel: 0298-61-3940, Fax: 0298-61-3748, E-mail: [s-togashi@aist.go.jp](mailto:s-togashi@aist.go.jp)

[5] 2003年度地球惑星科学関連学会長懇談会(拡大連絡会)議事録(案)

日時: 2003年5月29日(木)17:00 18:30

場所: 幕張メッセ 国際会議場 2F 201A 室

出席者:

青木 元(日本地震学会)、荒井章司(日本岩石鉱物鉱床学会)、安藤寿男(運営機構)、飯石一明(日本鉱物学会)、今井 亮(資源地質学会)、大村善治(運営機構)、鍵 裕之(日本地球化学会)、掛川 武(日本岩石鉱物鉱床学会)、倉本 圭(日本惑星科学会)、近藤昭彦(水文・水資源学会)、近藤 忠(日本岩石鉱物鉱床学会)、鷺谷 威(日本地震学会)、鹿園直建(資源地質学会)、清水 洋(日本地球化学会)、末永 弘(日本応用地質学会)、杉田倫明(日本水文科学会)、関 陽児(資源地質学会)、高橋幸弘(地球電磁気・地球惑星圏学会)、竹内 希(運営機構)、竹本修三(日本測地学会)、津田敏隆(日本気象学会)、坪井誠司(運営機構)、中井 仁(特別公開セッションコンピナー)、中川弘之(日本測地学会)、中田節也(日本火山学会)、中村正人(運営機構)、根本泰雄(特別公開セッションコンピナー)、野津憲治(日本地球化学会)、浜野洋三(運営機構)、原 辰彦(運営機構)、平原和朗(日本地震学会)、藤井良一(地球電磁気・地球惑星圏学会)、松本 剛(日本地震学会・日本測地学会)、丸井敦尚(日本地下水学会)、南島正重(日本地学教育学会)、諸井孝文(日本地震学会)、山野 誠(日本地震学会)、坂本尚義(日本鉱物学会) 以上 38名

配付資料:

1. 議事次第
2. 2002年度地球惑星関連学会連絡会議事録

3. 地球惑星関連学会 2003 年合同大会の概要
4. 地球惑星科学合同大会運営機構組織メンバー
5. 地球惑星科学関連学会連絡会、「地学教育」委員会の設立について
6. Goldschmidt2003 報告
7. 1990 年からの合同学会、連絡会の情報(開催場所、日程、参加学会、役員)

## 議事

### 1. 前回議事録確認(清水・連絡会会長)

### 2. 合同大会報告

#### (1) 2003 年大会報告(濱野・運営機構代表)

共催・協賛学会 19 学会、後援 32 団体のもとで、セッション数 85 件(昨年では 87 件)で開催した。参加登録者数は約 2600 名、論文投稿数は 1873 件で、各々昨年との比較では約 1 割減であるが、盛会であったことが報告された。昨年度までは会場の関係で青少年セミナーを開催していたが、今年度はそれにかわって特別公開セッション「地学教育の昨日・今日・明日 地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか? (略称:地学教育の展望)」を開催し、250 名ほどの参加者があり、活発な討論がなされた。

今回の大会及び会場に関して好意的な感想の他に、本年度の大会に関して以下のような具体的な意見もあった。

- ① 会期が 4 日間になったこと、昼休みが 1 時間半となっていること、会議用に適した小部屋がないことなどから、会議とセッションとの切り替え時間が十分とれなかったケースが見受けられた。[運営機構からの回答:夜の時間に制限がないので、会議を夕方に変更することもできる。]
- ② ポスターのスペースがやや手狭であるという印象があった。OHP の苦情などはなかった。
- ③ 会期が減ったため、オーラル発表の件数が減った。オーラルもポスターも 5 日間予定するのが望ましい。

#### (2) 2003 年大会の会計報告(中村・運営機構財務局担当責任者)

収支は現在のところ、若干の黒字となる見込みである。次回、会期を一日延ばす場合は 200 万円費用が余計にかかるので議論が必要である。

### 3. 2004 年大会予定(濱野・運営機構代表)

場所: 幕張メッセ国際会議場。

日程: 2004 年 5 月 10 日(月)から 13 日(木)または 14 日(金)まで。

### 4. Goldschmidt2003 国際会議報告(野津・日本地球化学会会長)

1150 件の投稿があった。(うち国内 520 件、国外 630 件。)ホスト学会は日本地球化学会であるが、学会員以外からの投稿も多い。

### 5. 地学教育関連について(中井、根本、南島)

- (1) 本大会の初日に特別公開セッション「地学教育の昨日・今日・明日 地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか?」を開き、盛況であった。
- (2) 「地学教育」委員会を地球惑星科学関連学会連絡会の下部組織として設置することが提案された。下記の説明(①から⑤)及び質疑(⑥)の後、本委員会の設置が承認された。各学会から委員を推薦する。
  - ① 委員会は合同学会の共催・協賛学会より推薦された者(1 名以上)によって構成され、地学分野および学校科目「地学」の教授内容、学習指導要領および教育課程、入試制度、その他地学教育に関する諸制度のあり方を検討する。
  - ② 当面は学校科目「地学」関連学会連絡協議会と共同して活動していく。
  - ③ 地学教育の教育という用語は学校教育の意味と捉えられがちであるが、教育という用語は広義の生涯教育の意味を含んでいることが補足された。
  - ④ 最初のフォーカスは、2006 年問題に代表される学校教育の問題の議論におきたい。
  - ⑤ 学校科目「地学」関連学会連絡協議会との関連などが説明された。
  - ⑥ 意見として、設立の趣旨が文面に反映されていないのではないかなどといったものが出された。
- (3) 日本地学教育学会の合同大会への協賛を承認した。

### 6. その他

#### (1) 連絡会次期役員を承認した。

会長: 平原和朗(日本地震学会、新任)。

庶務渉外担当幹事: 鍵 裕之(日本地球化学会、留任)、新任の庶務幹事 1 名の選出は平原会長に一任。

会計幹事: 末永 弘(日本応用地質学会、留任)、津田敏隆(日本気象学会、新任)。

ニュースレター担当幹事: 諸井孝文(日本地震学会、新任)。

#### (2) 2004 年 5 月合同大会終了以降の連絡会会長は、日本火山学会から選出することを確認した。

#### (3) 次回連絡会会合の日程

9 月頃に行う予定。

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース 第 28 号

2003 年 7 月 22 日発行

発行: 地球惑星科学関連学会連絡会

連絡会会長 平原和朗

編集: 地球惑星科学関連学会連絡会

連絡会幹事会ニュースレター担当 諸井孝文